

まちづくりの時代の公共空間・ コモンスペースのデザイン

KS
DP 関西大学
戦略的研究基盤
団地再編
リーフレット
Re-DANCHI leaflet

文部科学省 私立大学 戦略的研究基盤形成支援事業
『集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究』

AUGUST
2013
VOL. 132



図 1. 公共空間での活動風景 1)

■土木のデザインからまちづくりのデザインへ

1 土木のデザインの本質

土木でのデザインの本質を説明するとき、私が計画した1つの事例をあげている。島根県松江市穴道湖畔、岸公園の防波堤である。従来の波浪を力で防ぐ壁のような防波堤ではなく、長い斜面で波の力を吸収するものとなっており、人の集まれる場が創られている。ここで重要となってくるのが、数百年ごとのスケールで起こる自然の力と、今日明日の私たちの生活をいかにマッチングさせるのかということである。これは建築ではなく土木のオリジナリティであり土木のデザインの本質である。

2 まちづくりのデザイン

日本ではこのような防波堤、橋等の構造物単体のデザインの仕事は減少し、現在はまちづくりと一体となった仕事が増えてきている。

その典型として大分県竹田市があげられる。近世城下町の姿がそのまま残っているヒューマンスケールのまちであり、周囲には日本有数の棚田がある魅力的な場所である。ここでは、実際に棚田で活動を試みたり、住民とのふれあいを通し、研究室で町にとけ込みながら空洞化した城下町の図書館の計画

提案に携わった。このように、デザイン、研究、調査、構想だけでなく、現地での風景、暮らしのヒアリング、まちづくり行政のカウンセリングなども同時に行ってきた。

■コロンビアでの体験 公共空間の考え方

海外コロンビアメデジン市でのベレン地区公園図書館の設計での体験は、これまで私がもっていた公共空間の概念を揺らす事につながった。メデジン市のプロジェクトは、問題を抱える5カ所の地区に図書館をつくり、コミュニティの核にする事が考えられていた。私たちはそこに図書館とともに3つの広場を計画した。この計画は市民に熱狂的に受け入れられ、公共空間に対して市民がいかに「平和」を求めていたかが痛感された。このプロジェクトを通じて学んだ事は公共事業は「人の飢えに応えられるもの」であるということである。日本における「飢え」についてもこれから考え続ける必要がある。

このような活動中に2011年地震が起こり、そのことに専門家としてどう考え、どう活動してきたかを事例を交えながら解説する。団地に暮らす事は町に暮らす事であり、私が考えてきた町づくりの考えは本質の部分で共通していると考えます。



図2. 島根県 岸公園²⁾



図3. 城下町再生への議論³⁾

■土木とまちづくりのデザイン

1. 島根県松江市岸公園の湖岸堤

県立美術館の敷地の前の湖岸堤を美術館の整備とあわせて一体整備した事例である。従前の波浪を力で防ぐ構造物から、長い斜面の形成により波のエネルギーを吸収するなどらかな構造物としている。長期的なスパンでおこる災害に対してその一瞬の防御をそのまま形にしても風景にはならない。数十～数百年ごとに襲っ



図4. コロンビア風景⁴⁾

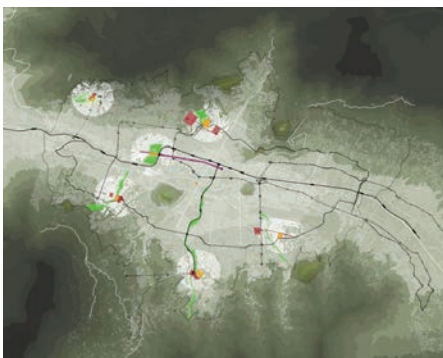


図5. ハファルド市長の計画

てくる自然の力に備えながら、豊かな日常の風景をいかに実現するかという、建築とは違う土木ならではの時間スケールでのデザインである。

2. 竹田市全体の調査とデザイン

竹田市の市長からの白水ダム周辺環境の整備の依頼が始まりだった。このプロジェクトでは研究室全体でまちづくりに関わり、実際に住民の方々と会話をしたり、棚田での仕事に参加し、地元に着した調査を行った。役所とも議論を行い、調査結果からより魅力的なまちづくりの方向性を示し、さらには具体的なデザイン提案も行い、竹田市の悩みを様々な方向からコンサルティングしてきた。現在は従来の土木単体のデザイン以上に、このような町全体を共に創る力が必要となっている。

■コロンビア・メデジン市 ベレン地区公園図書館設計

この計画は、私がまだ内藤廣先生の景観研究室の准教授であったときに参画したものであり、この国での経験は自分自身の公共空間の考え方に衝撃を与えた。

地域や町の問題解決の手助け

コロンビアは世界で最も治安の悪

い国ひとつであり、メデジンの場合、山裾にいわゆるインフォーマルセクターの不法占拠地が広がっている。ハファルド市長は、メデジン市内でも特に治安の悪い5カ所での公共空間の改善をはかっていた。その場にコミュニティの核として図書館と広場をつくる事でまちに平和を広めていく。地区の中でも負の記憶である場所を、いかに転換させるかが企図されていた。

私たちは敷地の中に、ダウンタウン側のイベントなどを行う「人々の広場」、アウトルート側に既存のアーモンドの木を主体とした「緑の広場」、そして中庭として全面に水をはった「水の広場」の3つの広場を計画した。広場が主役であり、その他の機能は広場という空間を成立させるために配置した。

メデジン市ではあまりの治安の悪さに自由に外出できなかったこともあり、住民はいつでも好きなき、好きな人と外で過ごせる空間を望んでいた。

図書館竣工イベントは大盛況となり人々がいかに「平和」に飢えていたかが如実に表れていた。ここで私が学んだことは公共事業、公共デザインは人々の「飢え」に応える事ができるということである。



図6. 図書館配置図



図8. 人々の広場⁶⁾

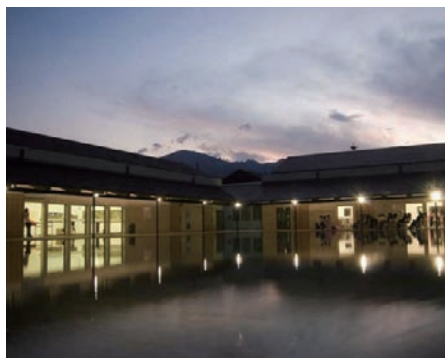


図7. 水の広場⁵⁾



図9. 緑の広場⁷⁾



図 10. 大槌町、被災状況⁸⁾

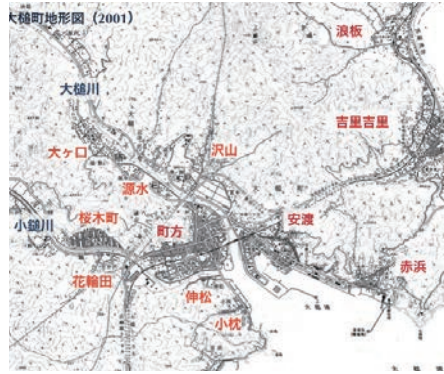


図 12. 大槌の集落



図 14. 屋台プロジェクト¹¹⁾



図 11. 人一人いない広野町⁹⁾



図 13. 津波被害を免れた小槌神社¹⁰⁾



図 15. 手作りの屋台¹²⁾

■ 2011.3.11 後の被災地の光景

2つの写真がある。1枚目は大槌の町。現地の東大のスタッフが地獄と称したその場所は、がれき、プロパンガスの匂いが漂う一つの被災地の光景である。もう一枚は福島県双葉郡広野町。避難勧告を受けた町自体の物的環境は残っているにもかかわらず、人一人の気配のない名状しがたい光景である。この光景を見たとき、これは人と人、人と土地のつながりが生きていないと風景は現前しないということを感じた。この震災の復興に風景の専門家としてどう考えていくのか。大槌町では1割弱の人たちが津波の被害を受け、住人のほとんどが家族、友人、知人を失っている。土を盛り、防波堤を創るのではなく風景をつくることが必要なのではないか。身のまわりに身近な風景が常にあるからこそ、自分が人や土地（自然）とつながって生きているということを感じられるのではないだろうか。

以前、フリージャーナリストの桐谷エリザベス氏が北朝鮮から帰国した曾我ひとみさんのニュースを見ていて「うらやましい」と言ったことがあ

る。昔つきあいのあった人たちが故郷に残っており、出迎えてくれる場がある事は幸福なことである、と。風景とは、単なるフィジカルな環境の眺めではなく、「土地との関係性が環境化したもの」と考えている。風景がたちあがることによって、大切な肉親を失った人でも、自分は一人ではない、ということを感じる事ができ、わずかでも救われるはずである。

■復興の現場で考えていること

私がかかわっている岩手県大槌町には大きく5つの集落が存在する。中世以来の政治・経済の中心である町方、海を挟んで安渡、漁民的なメンタリティが今も残る赤浜、そして吉里吉里、浪板である。帰属意識は大槌町ではなく各々の集落にあり、お互い全く別国のように振る舞っており、非常にもろい地域である。

町方、赤浜では都市計画用途地域が指定された市街地の約7割が被害を受け、その中の8割が全壊した。町方では町長はじめ幹部、復興を担う技術者の多くが亡くなった。

そのような中、土木学会の調査で津波の被害を免れた神社を少なから

ず見ることができた。周辺の町が倒壊している中、神社が立地している地点は、人間が土地とともに生きてきた原点である場所であることを考えると、その立地に意図がないとはいえない。

■屋台プロジェクト

被災地の調査後、人と人のつながりを実際につくらねばならないという考えから、誰でも来てお酒を飲める場所として仮設の屋台を提案した。重要なのは「場」と「つくり方」である。出店者の意向はどうしてもショッピングセンター等の人が集まる場所を選んでしまう。しかし私は大槌の暮らしと土地の結びつきを実感できる場である小槌神社を出店場所に推した。補助金などの行政のお金は使わず、地域に残る「結い」の精神を復興の起源とした。屋台の店主は場を提供し、享受する人は手間を出し合いその屋台をつくるという考え方である。地域の製材所の協力も得た。完成後、人が集まって明かりが灯り、会話が生まれ団欒が生まれると、周囲ががれきに囲まれていようとそれは「風景」であるとい



図 16. 屋台が照らす団欒の風景 13)
う感情を抱いた。

■大槌町東日本大震災津波復興計画

人と人のつながりを修復することと同時に、私は行政側の復興立案過程にも携わっている。新港町地区の被災状況は、他の地域の状態よりひどい。防波堤、RC造の基礎、高架橋、すべてが倒れている姿を見て深刻な問題意識を持った。

このことから復興計画で掲げたコンセプトは、高台移転など単純に場所を移動するのではなく、もとの土地に住み続けること、市街地を集約し密度を保つことである。単身高齢者が点々と住まう事は絶対に避けねばならない。これは防災上にぎわい、活気を維持するうえで重要である。大槌の人口は被災前が約 16,000 人で、約 20 年ぐらいたつと大正時代ぐらいの人口規模に変化していく。大槌町を

歴史的にみると山裾にある街道に市街地がはりつき、自然に対して最も素直な住まい方をしていた。このような元の町のかたちを集約していく事がオーソドックスな解決法であると考えている。

町方の基本計画は「歩いて暮らせる町」である。いざというときに歩いて避難できる町にするには、普段から快適に歩いてくらせる町である事が必要である。豊かな公共空間を計画目標に掲げている。

大槌にとって、何が必要不可欠な町のつくりかたなのか。ネットワークを重視した区画整理であっても、できあがるフィジカルな環境は従前の大槌とは全く別のものになってしまう。住む人もこれからかなり減る。「ひとのつながり」そのものは、環境のフィジカルな形の根拠にすることは難しい。とっかかりとなるのは大槌の湧水である。町を成り立たせてきた自然のあり方、営み、それにつきあってきた人間の暮らし記憶、それらをとっかかりにして公共空間を計画していきたい。

■身近なパブリック＝コモンの再構築への課題

震災で痛感したのは、戦後日本を発展させてきた合理主義・個人主義

がまったく被災地では通用しない事である。すべて個に帰着させる事に対する矛盾や、地縁コミュニティのある町で区画整理を行う矛盾等。様々な矛盾が今回の体験で浮かび上がった。

その中で、公共、コモンの価値を高める必要性を感じている。町であろうが集合住宅であろうが、共通の課題として考えなければならぬ。限られた予算とマンパワーを機能分担していくだけでは限界は明らかであり、その分関係性の構築で補っていく事がこれから必要ではないだろうか。

関係性の時代をどう創っていくのか、団地についても団地の中だけで閉じていては限界があり、団地とまち、団地と地域との関係性をどう創っていくのかを同時に考えていくことが重要になってくるだろう。

大槌の町でおこっている同質の問題が凝縮され、現在の団地の中でもあるいは他の町でもおこっているのだと思う。

出典

1)2)3)4)5)6)7)8)9)10)12)13)14) 撮影：中井祐

11) 南雲勝志氏提供

15) 三関伊道中図；盛岡公民館蔵。



図 17. 新港町の深刻な被害状況 14)



図 18. 安政年間の大槌・町方の様子 15)



図 19. 人のつながりを創るコモン計画

『まちづくりの時代の公共空間・コモンスペースのデザイン』

レクチャー：中井 祐（東京大学大学院 教授）

記録・作成：中尾 礼太（関西大学大学院 博士前期課程）

倉知 徹（関西大学 先端科学技術推進機構）

（講演：2012年6月19日）

本リーフレットは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「集合住宅「団地」の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究（平成 23 年度～平成 27 年度）」によって作成された。

発行：2013年8月

関西大学

先端科学技術推進機構 地域再生センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

先端科学技術推進機 4F 団地再編プロジェクト室

Tel : 06-6368-1111 (内線 : 6720)

URL : <http://ksdp.jimdo.com/>